

## カナダ渡航して、 ようやく1週間です

Department of Surgery and Institute of Biomaterials  
and Biomedical Engineering, University of Toronto  
Latner Thoracic Surgery Research  
Laboratories University  
Health Network-MaRS Centre

平石 尚久

(東京大学医学部附属病院呼吸器内科)

コロナ禍で、予定していた2020年夏のトロント大学の留学が延期となっておりましたが、先方の許可があり、ようやく2021年4月末に家族でカナダに入国できました。

ビザの申請は、私自身は（カナダでは生命科学系の研究職は Essential worker と認められるようで）ワーキングビザの申請で困ることはありませんでしたが、同行家族のビザ申請については、移民局へのメールでの問い合わせのうえでのレター発行なども必要となり、色々と煩雑で、コロナ禍のなか先達で渡航された日本人研究者の方々とのメールでのやりとりが大いに参考になりました。カナダ渡航に際しては、出国前に1回、入国後に2回（計3回）のコロナPCR検査を家族みなで受ける必要がありました。入国後はホテル→自宅での計14日間の自主隔離生活を余儀なくされ、いま1週間強が経過したところです。自宅隔離中は、食料や日用品、家具も買いにはいくこともできず、職場の上司・同僚の方々に大変にお世話になっております。

オンラインで参加するラボミーティングで現在進行形の研究の様子に心をときめかせつつ、日中は家に閉じ込められている子供たちのエネルギーを受け止めつつ、夜な夜な大学入職用の大量のeラーニングを少しずつ進める…日々です。

来年は研究の進捗などをきちんとご報告できるように、精進したいと思っております。

また、このような貴重な留学機会を与えていただいた上原記念生命科学財団の関係者の方々には心より御礼申し上げます。今後ともよろしくお願い致します。

## トロント留学記

The Hospital for Sick Children  
Cell Biology Program, Muise Lab  
Division of Gastroenterology, Hepatology and Nutrition

南部 隆亮  
(埼玉県立小児医療センター消化器・肝臓科)

私は2019年4月から2年間、The Hospital for Sick ChildrenのDr. Aleixo Muiseのラボにリサーチフェローとして留学し、Monogenic inflammatory bowel disease (Monogenic IBD: 単一遺伝子異常によって引き起こされる炎症性腸疾患)の原因となる新規遺伝子の探索・病態解明の研究に携わりました。

Muise Labには、Monogenic IBDが疑われる子ども達の検体サンプルが世界中から集められており、その数8,000を超えるゲノムデータからMonogenic IBDを引き起こす新規原因遺伝子を見つけ出し、遺伝子変異を導入した細胞・動物モデル、患者さんの腸管粘膜組織から培養されたオルガノイドなどを用いて、IBDを引き起こすメカニズムを解明しています。これまでTTC7A、TRIM22、SYKなどの単一遺伝子異常が、IBDの原因となることをNature GeneticsやGastroenterologyなどに報告しています。私は、新規原因遺伝子のプロジェクトや日本の患者さんの遺伝子解析などを経験しました。一つ一つのプロジェクトで多くの国・施設とコラボレーションがなされており、私が担当させてもらったプロジェクトでもアメリカ、ドイツ、イギリス、中国、オーストラリアなどの研究施設とオンラインを通じて意見交換を交わしながら進めていきました。当たり前のように国境を越え、手を取り合い問題解決に挑むプロセスは、これまでに味わったことのない力強さがあり、とても印象的なものでした。

トロントは、“人種のモザイク”と呼ばれるにふさわしい街で、多文化的かつ人口構成も国際色豊かです。多様性を尊重する多様文化主義は、国外で生活したことのなかった私にとって自分の価値観を新たにする貴重な体験となりました。留学2年目はCOVID-19による未曾有の事態となりましたが、今となってはこの様な異文化の中で危機を共有できたことも貴重な体験だったと感じられます。

ここまで良いことばかり書いてきましたが、海外留学は良いことばかりではありません。恥ずかしながら、留学前は“留学＝華やかなイメージ”を持っていましたが、2年間を振り返ると“泥臭さ”の方が目立つぐらい、海外で働くこと・修行することの難しさを何度も痛感しました。日本では当たり前に行っていたことが、海外では全くできなくなってしまう。特に最初の1年は自分自身のパフォーマンスに幾度となく忸怩たる思いをしました。諸先輩方から伺っていたように、留学には目的と覚悟が必要なのだということが今ならよく分

かります。成果・成長は常に“自分次第”一周囲から与えられるものでも強いられるものではありません。私が外国人だからというわけではなく、カナダ人の学生・フェローも同様に、北米特有の確固たる教育方針であると感じました。振り返れば自分と向き合い続けた2年間でもあり、精神的にタフになれたことは留学中の成果の一つと言えるかもしれません。

最後になりましたが、留学に際し多大なるご支援をいただきました上原記念生命科学財団に厚く感謝いたします。トロントで学んだことを活かし、医師として貢献できる様に引き続き精進して行きたいと思います。